

「安全じゃあ、安全じゃあ？」 「安全じゃあ、安全じゃあ？」

その昔、1974年の多摩川水害を題材にしたTVドラマ『岸辺のアルバム』を家族と見ていた私の弟は「川のそばに家は絶対建てない」と突然話し始めた。「じゃ〜どこに建てるんだ？」と私が聞くと「どのようなことがあっても川の堤防より高い場所にする」と答えた。私は意地悪く、「高い場所に建てて、土砂崩れになったらどうするんだ？」と聞くと、弟は黙り込んでしまった。弟は大学卒業まで長沼にいたので、標高が5〜6mしかないこの地帯の水害による被害のことはよく覚えていたのだろう。この56災害と呼ばれた昭和56（1981）年の8月4日の朝、自宅のドアを開けた時、目の前に現れたのは銀色に光る水面だった。

それから20年が過ぎ東京・町田に住む弟の1戸建ては相模川の堤防よりは明らかに高い場所にあるが、その代わりローン地獄と通勤地獄を味わうことになる。

56災害では長沼町の半分以上の面積が水没した。原因は地域に数カ所ある、ポンプ場の処理能力が一晩300mm以上の降雨に対応できなかったからだ。後から聞くとところによる

と、当時の処理能力は水害があっても、転作率が20%程度だった水田に30cmの水が24時間貯まることを基準としていた。担当者に「では水害があった場合、水田農家は24時間、30cmの水を貯めておいていただけるのでいいか？」と聞いた。もちろん担当者は答えることはできなかったし、現実には洪水時に畔を壊して、水を排水させた水田農家を責められなかった。基準とはどれほどの価値を持つものなのか疑問を感じた。

ここからは勇気をもって発言することになる。「安全とは？ 安心とは一体何なんだ？」と自問自答した。

高い土地に住めば安全なのか、いや地すべりの被害がある。では海岸線沿いは安全か、やはり津波の被害がある。都市は田舎よりも安全か、微妙だ。どっちもどっちだが不安の落ち込み度は都市の方が多いかもしれない。という都市の人はどんなことがあっても田舎に住みたくないとかダダをこねる。ニュージールランド

日本が1日で変わった 3月のあの日

Vol.37



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

は米国よりも、日本よりも安全か？では北と南では？よく北海道は寒いから大変だと言う人がいるが、凍死した人は東京の方が多く、米国、ヨーロッパでも同じように緯度が低く暖かい地域の方が凍死者は多い。台風などの自然災害も北の方が少ないのに、北の優位性が見えないのは、東京が物理的中心であって、そこから離れば損であるとの教育をさせられている

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

事実を忘れたのであろう。……一体どこに家を構えれば良いというのだ。

先般米国務省の前日本部長が「沖縄はゆすり名人」発言をした。その一つが「なぜ米軍管理の飛行場の周りに住宅地を建てさせたのだ?」というものだ。政治的にはまずい発言ではあるが、北の一市民から見ると、沖縄の人たちはゴーヤを作らないために自分の意志を持って都市に住んでいるのだから、やはりヤンキー日本部長の発言は、あながち間違いとは言えないと感じる。

よく、安全は科学であり数値で表すことができ、安全性が高ければ不安要素があっても生きていけると言う人もいる。確かにその通りだ。では安全性が低くて、不安を感じている人たちはいつも危険と直面しているのだから? そこに不運や偶然が重なり合うことはハイリッヒの法則で説明できるか。

日本の多くの都市は平野に存在する。当たり前のように思われるが、それには理由がある。その都市のほとんどが昔は農地であり、ほかの地域よりも多くのコメが収穫できる農地である点だ。人口1万2000人の長沼でも同じである。人が集まる地帯は標高がわずかに高く、ほかの地域よりは水害の被害が少ない。

札幌、東京、名古屋、大阪、福岡

など、どの地帯も100年前までは水田が広がる優良な田んぼばかりだ。水田が街になることは都市に住む人だけの問題ではなく、生産者の責任も問われることになるのか。

わずかの農地には、畜産業が集中することになる。99・9%の畜産農家は遺伝子組換えのコーン、同じく綿実、同じく大豆、同じく菜種入りの飼料を使い安全・安心を生産者のみならずJA、流通業界、販売関係者と手を取り合ってアピールするが、不測の事態も経験する。宮崎県では鳥インフルエンザで半径5km以内の150軒の養鶏農家の鳥が移動禁止になることがあった。正直とても驚いた。150という数字だ。これは過密を意味する。

2000年秋に北海道・本別町で口蹄疫が発生したが、後から聞くところでは半径5kmでも20軒程度の畜産農家しかなかったそうだ。北海道ではこの1件の事案で済んだが宮崎ではそうではなかった。

やはり疑問が残る。また同じことを繰り返す要因を残し、再起を目指すことは、本当に地域のみならず、生産者自らの利益につながるのだろうか。行政が関与して、止めさせる勇気も、将来の利益のために必要ではないか。

これは、農業だけの話ではない。

自分でできること、 未来のためにすべきこと

恥ずかしい話だが、TVを見て自分は冷静であった。映像に映る海はまるでハリウッドの世紀末系映画のように金属が溶解して行く。それを平気で見ていることができた。では住民はもっと早く避難していれば、多くの犠牲を出さずに済んだのに……と思っても、我々にはどうすることもできない。

こんな悲惨な状況であっても、暴動や略奪がないのは素晴らしいと海外メディアに褒められたと思えば、でも日本には行くな! と言っている。整合性はあるのか。

残念ながら過去の事例が教訓として理解されない場合もある。

1993年の奥尻の津波では多くの家が流されたが、その後、同じ場所に家を建てたいと申し出る人がいたことだ。同じことが阪神・淡路大震災でもあったと聞く。これには、ものすごく疑問を感じた。今は良いが、そんな悲劇を忘れた次の世代が同じことを経験することは誰の責任なのだろうか。米国のある州では水害のひどい河川を国が買い上げて、住民を二度と住まわせないことまでやったことがある。

もう一度、自分にできることは何

なのかを問うた時、単なる励ましでは何の役にも立たないことはわかる。できるとしたら献金や寄付であろう。使い古しの服や食品を送っても処分される可能性が高いことは過去に経験済みだ。明日の生活を考えればやはり現金が役に立つのは間違いない。であれば、それに関連する法律は柔軟に改正されるべきである。つまり、このような緊急の献金行為や日頃の寄付行為を税金から100%控除すべきであろう。米国に見習い、気持ちよく寄付を与える側の本質である。自己満足。を、ハシタナイと思わせてしまう社会は実はいやらしい。

日本が1日で変わった3月のあの日、あなたはどこにいましたか?

いつもと同じように起き、歩き、働いていたあなたは生きている自分に「罪」を感じたのか。

あるものは子供たちを強く抱きしめ、何もできない自分に怒りと恐れを感じ、あったことのない人たちのことを祈り、どのような前途多難が待ち受けようとも、我々はこれからもすべての人たちと強く生きる道を選択することになる。

(一部、カントリーシンガー、アラン・ジャクソン、Where Were You When The World Stopped Turningから引用)